

概要報告

実施期日	7月28日(火)【午前】
部会名	小学校 音楽部会

テーマ 『一人ひとり、思いや意図を持ち、楽しく表現活動しよう』

提案概要

歌唱表現において、みんなで声を合わせて歌う楽しみを味わい、楽譜から強弱記号を読み取って歌唱することができる児童が多くいる。一方、全体場で表現することに苦手意識をもち、主体的に活動することが難しい児童もいる。そこで、一人ひとりが主体的に表現の工夫について考え、思いや意図をもって音楽表現をすることの楽しさを経験できるように活動を実践した。

実践1 「だれかが口笛ふいた」(5年)

3種類の旋律それぞれの特徴を感じ取って表現活動を行った。まず鑑賞をした後、ワークシートを使って「音の動き・リズム」「強弱」「明暗」「曲の様子」のポイントを捉えてから歌唱した。次に、個人のワークシートを基にグループで話し合い、思いや意図をもった表現の工夫をした。グループ内での発言を経験させることで、自分の思いを友達に伝える事ができるようになってきた。一方語彙量の少なさが顕著に表れた。なぜそのような表現をするのかを言葉で伝える事が難しい児童が多く見られた。

実践2 「われは海の子」(6年)

5年時の課題である「語彙量の少なさ」を受けて、年度初めより「音楽のもと」(音楽を形づくっている要素)を見つけ可視化することで、音楽を認識する上で着目すべき要素を全体で共有し、それらの言葉を使って表現の工夫ができるような土台作りを行った。「われは海の子」では、まず歌詞の内容や特徴的なリズム、旋律の動きを全体で確認し、歌唱練習を行った。その後、強弱記号のない楽譜を用意し、グループごとに強弱記号を工夫させ、その強弱記号は何を表しているか考えさせた。そして各グループ、工夫した点が聴き手に明確に伝わることを目指して歌唱の練習・発表を行った。

2年間を通して、一人ひとりが意欲的に生き生きと歌唱表現ができるようになった。話し合い活動では、音楽を形づくっている要素に着目し、音楽記号を使って思いを伝える児童が増えた。また、児童が自分たちで音楽を作り上げる事の楽しさを味わうことができた。

課題として、表現活動を深めるためには、教師側の発問や言葉がけの工夫が必要であることがわかった。また子どもが思いや意図をもって表現したことを、聴き手に伝わるように演奏することの難しさがあった。

質疑概要

質問1：情報の共有のために研究会で使用する楽譜を複製することはできないのか。

楽譜に関する資料の扱いは厳しく、研究会等の場で使用するために教科書を無断で複製することも禁止されている。許諾をとることはできるが、費用や時間がかかる。

質問2：表現したい思いを「強弱」だけで表すのは表現の工夫になるのか。言語活動を取り入れるがために、それが逆に足かせになっているのでは。

「工夫して表現しよう」と提案しても子どもにとってはとりかかりにくいと判断した。年度初めから「音楽のもと」を集めてきたので、それらの音楽用語(今回は強弱記号)を使って活動を行った。

質問3：子どもに自由に解釈をさせて発表させた後、教師はどのようにまとめていくのか。

活動中、子どもには「〇〇な感じ」と言語化する、線で表現するなど音楽を表現する中で大きく崩れなければどのような解釈や表現の仕方もありとした。今回の学習の後、この曲を歌う機会に一斉指導を通して伸ばす音や強弱など修正をした。

質問4：グループ活動をすると強い児童の意見に流されがち。一人ひとりの思いを大切にするには一人で活動した方がよいのでは。

言語活動を取り入れるにあたり、友達に思いを伝える活動を取り入れたかった。4人という少人数グループでの活動だったので、全員が意見を言えていた。活動内容によってグループの人数を調整したり、事前に個人でワークシートを書き込んだりすることで、自分の思いに自信をもつことができた。

研究協議概要

柱「言語活動を充実させるためのグループ活動を通しての思考力・判断力・表現力などをはぐくむ学習プロセスづくりの工夫について」

【ワークショップ】

グループで「われは海の子」を、思いや意図をもって表現の工夫をし、聴き手に伝わるように歌ってみよう。グループで話し合い、練習の時間をとって発表する活動を行った。どのグループも表現するうえで一番重要視したのが歌詞であった。歌詞から情景をイメージして、それを強弱に表すという過程をとっていた。しかし強弱だけでは伝えきれない部分もある。「力強い感じ」だからf、「やさしい感じ」だからp、というように単純に決めてよいのか、それで思いが聴き手に伝わるのかなど、グループ活動を通して疑問や課題が見えてきた。また、歌詞の抑揚と音形が必ずしも一致しないため、歌詞が正しく聞き取れないという課題も見えた。ブレスの位置や強弱を工夫するグループもみられた。また、強弱というのは声の大きさだけでなく、歌う人数を変える（2人、全員など）という手段もあり、それぞれのグループの解釈によってそのような工夫もみられた。

今回のワークショップでは、強弱もテンポもグループで話し合い、自由に表現していいということだったが、「自由」という言葉が逆に表現を難しくする場合もあり、取り掛かりにくさを感じるグループもあった。ワークショップを通して、実際に子どもと同じ活動をする中で発問する際の注意点や、ポイントを絞ることの重要性など、身をもって体験する時間となった。

【ワークショップを踏まえてグループ協議】

協議の柱に沿って、「言語活動」と「グループ活動」の二点を中心にグループ協議がなされた。音楽活動において「言語活動」を求めるのはとても難しい。音楽的な語彙がまだ育っていないため、「〇〇な感じ」という思いをもっても、それを歌唱表現に取り入れるために子ども同士が共有するまでに至らないのが現実である。そもそも言語活動とは表現そのものであり、音楽的な語彙も含めて一年生からの積み重ねが大切だという意見もあがった。発信するだけでなく、聞いて感想を持つことも言語活動の一つである。自分の思いを「伝えたい」「届けたい」という主体的な気持ちがあるからこそ表現の工夫が生まれ、それを伝えるための語彙も増えていくのではないかという話もあった。また、「表現する」というと上手に話せない子や語彙量の少ない子が参加できない状況も生まれがちだが、友達が持った思いを聞いて「自分もそう思った」と感じることで、挙手することで同意を伝えることも「表現」になる。そのような活動の工夫を教師側が行えば、もっと自分の思いを表現できる子が増えるのではないかという意見も出た。

「グループ活動」を取り入れることももちろん大切だが、その前に個の力を高めることが重要である。個の力があってこそ、全体の表現力が高まり、グループの話し合いも深めることができるという意見があった。また、グループの人数に関しても議論がなされたが、活動内容によって流動的にすべきという意見が多かった。基本的には3～4人が限度。歌や合奏などで発表する場合は6～7人がよい。また合奏ではパートごとに下級生に教える活動など、グループ活動がコミュニケーション能力を育む機会になれば有効である。

あくまでも「言語活動」が目的ではなく、音楽活動を活発に行うための手段としての「言語活動」であり「グループ活動」なので、教師が明確なゴールと見通しをもって学習活動を組み立てることが重要であると思われる。

まとめ概要

グループ活動は全体場で発言が苦手な児童も主体的に活動できる有効な手立てである。そしてグループ活動の効果として子ども同士の受容感がある。発言している友達に対してうなずいたり、同調の態度を示したりすることが発言者の自己肯定感を高めることにつながる。また音楽の中で身につける学力とは、音楽の要素や仕組みを聴き取って、その働きが生み出すよさや美しさを理解すること。なんとなくではなくなぜそう思ったのか、音楽的要素や仕組みに注目して聴き取り、感じたことを言葉で表現できる子を育てたい。そのためには教師側も、表現が工夫できるような教材選びの工夫が必要となる。「工夫してみよう」だけの声かけではなく、ポイントを絞ってあげることで子どもも取り掛かりやすい。そして発表の時間も、ポイントを絞って聴くよう声を掛けることで、工夫した点や表現に注目して聴くことができるようになる。

今回のテーマである「表現活動」を成功させるためには、活動の手立てを考えることも重要だが、子どもが楽しいと感じたり、思いを伝えたいと願ったりする自発的な興味・関心が土台であるので、教師はこれからも教材研究やワークシートの工夫に力を入れ続ける必要がある。